



小粒な精密化学工場を目指して

古川 実*

1. 社名 株式会社 三宝化学研究所
2. 社長名 別所重秋
3. 所在地 堺市神南辺町1丁31番地
4. 電話 0722-(32)-3845
5. 資本金 9,600万円
6. 従業員数 115名
7. 製品名 医薬, 感光剤, 写真薬, 染料
各種中間体 製造

当社は昭和25年ナフトール染料製造を目的として創業し、その後約30年の間に医薬、感光剤、写真薬、各種中間体と製品分野を拡大して参りました。

即ち、現在堺市にある本社工場では染料、感光剤及び各種中間体を、和歌山工場では医薬、写真薬を主体に生産しており、また静岡の工場用地は将来の増設用として用意しております。

各種ファインケミカルスの生産は多種少産とならざるを得ず、またバッチ方式ではありますが高付加価値を狙って製品を選択しており、知識集約型の企業として今後も只管前進を続ける所存であります。

昭和54年度に於ける販売量は約800t、販売額は約20億円であります。

次に当社として特に留意している事項に就て御説明致します。

1. 企業信用

当社では企業信用の確立を特別重視しております。

この事は社会、特に地域社会に対し、また特意先に対し、将又従業員に対しても重要な事項と考えております。

之は先づ対外的に迷惑をかけるようなことは一切しないよう努めるということでありませう。

また一度約束したことは誠意をもって守るということでもあります。さらに嘘の方便は使わないで正直をモットーとするということでもあります。

例えば、財務面に於ける信用の維持、安全、公害面に関する地域社会に於ける信頼感、製品の品質保証、出荷納期の厳守、その他相手方の企業秘密、特に技術面の秘密事項の漏洩防止、など対外的に誠実に相対して企業信用の確立を第一と考え努力を積重ねております。

2. 技術

メーカーである限り技術は最も重視すべきことは当然であります。高付加価値のファインケミカルスを対象とする場合、その製造には有機合成反応の複雑な組合せが必要であり、従って出来るだけ広範な合成反応を駆使出来る技術一特に生産技術とそれを可能にする生産設備一を必要と致します。

当社で現在実施している合成反応は

- ① ニトロ化
- ② 還元(硫化還元, 鉄粉還元, 亜粉末還元, 水素還元, 水素添加 等)
- ③ ジアゾ化
- ④ ニトロソ化
- ⑤ カップリング
- ⑥ ハロゲン化(特殊塩素化, 臭素化)
- ⑦ アミノ化(アンモノリシス)
- ⑧ 酸化
- ⑨ 縮合(脱水縮合, 環化 等)
- ⑩ 加水分解
- ⑪ アルキル化(メチル化, エチル化)
- ⑫ エステル化
- ⑬ 重合
- ⑭ ヒドロホルミル化, フリーデルクラフツ反応, サンドマイヤー反応 等々

*古川 実 (Minoru FURUKAWA), 株式会社 三宝化学研究所, 専務取締役

以上、特別な高温、高圧反応および特殊設備を要する場合、または悪臭物質を取扱う場合を除き各種ファインケミカルスを生産するに支障のない程度の技術力、技術の巾の築積を行っており今後も努力を傾注する考えであります。

然して生産するということは、安全、衛生、公害面に於て何等問題を起さず、然も品質、コスト、納期を目標通りに守り、さらに生産性の向上を図ることを当然の務めとして、日々生産活動を進めている次第であります。

3. 製造設備

製造設備はバッチ式、汎用性を基本としており、各種反応に適用出来るよう配慮して設置することに致しております。之等は製品のライフサイクルに機動的に対応し、新製品の開発を可及的速に進められるようにする為であります。現在設置している製造および関連設備は次の如きものであります。

- ① 反応釜および反応槽
(容量) 500 l, 1000 l, 2000 l, 3000 l,
5000 l, 8000 l
(材質) SS, SUS, FRP, GL
- ② オートクレーブ (1000 l, SS)
- ③ 真空蒸油装置
- ④ 乾燥機, 真空乾燥機
- ⑤ 粉碎機, 混合機
- ⑥ 遠心分離機, フィルタープレス
- ⑦ 加圧濾過機, 真空濾過機, スパクラーフ
ィルター
- ⑧ その他, 冷凍機, ボイラー
また公害処理設備としては
- ① 工場廃水処理設備 (中和, 凝集沈でん,
散水濾床)
- ② 硫化廃液処理設備 (酸化, 濃縮)
- ③ 各種排気処理設備 (一般ガス洗滌装置,
NO_x 除去装置)
- ④ 各種粉じん除去設備

4. 労 務

当社には労働組合はありません。之は組合は

ないがそれに十分代行出来る従業員の社内組織があって、その組織で労使間の諸問題、例えばベースアップ、賞与、労働条件、福利厚生に関する諸問題に就て労使協調路線で互に十分意見交換をし協議決定して行く方式が安定し、かつ効果を発揮しているからであります。即ち従業員はその組織を利用して主張すべき権利は十分主張出来るし、また会社側の考え方に協力すべきことは進んで協力し、会社側も従業員の要望には可能な限り受け入れる努力を行い、万一やむを得ない場合は率直に理由を明らかにして協力を求め、現在その運営は非常に良好で、労使間の信頼関係は当社の誇と考えております。

5. 研究開発

高付加価値を狙う限り製品のライフサイクルは短い場合が比較的多いようであります。従って不断に研究開発の努力を行い、新製品の開発と新製法による改良を効率的に進め、之によって販売額および利益の維持増進を図らねばなりません。

以上はいかなる企業にも当てはまる原則ですが、当社程目まぐるしく新製品を試作し、製品化している企業は少ないかも知れません。

当社は研究開発を最重要視し、それによって高付加価値を維持することを基本としております。

今 後

基本的には従来路線、即ち高級ファインケミカルス生産を目標に進めて行くことは変わりありませんが、今後工場内の根本的な環境整備を行いながら、生産設備の新鋭化、合理化を図りより広範な有機合成反応を自由自在に駆使して、小粒ながら優秀な技術を背景とした化学製品を世に送り出せるよう懸命に努力を続けたいと考えております。

特に静岡工場も何れ遠からず稼働させ、一段と生産の基盤を拡大しながら、堅実で誠実な企業として発展を目指す覚悟であります。